



個性輝くまちづくり  
厳しさの中で  
子どもたちが輝く舞台

神奈川・横浜市 ヨコハマ・都築ミュージカル委員会



朝九時、大道具や小道具の人たちが手づくりの背景やスロープ、ピアノなどを搬入し舞台を作っていく。舞台作りが一段落したら、今度は舞台転換の打合せに余念がない。一方衣装係が衣装を持ち込んでくる。メイク、ヘアメイク、そして出演者たちも大きなバッグを肩にかけ続々集まってくる。

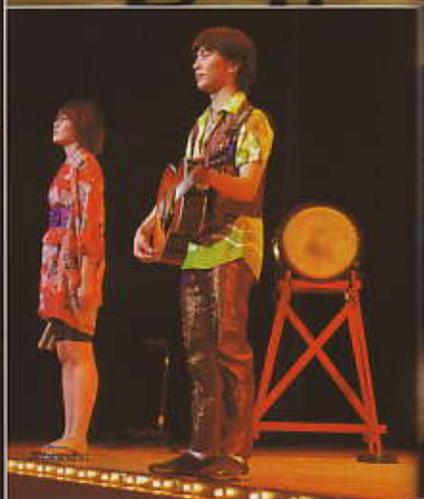
午後、舞台稽古が始まる。観客席の中央で稽古の成り行きをじっと見守っていた演出家の岡本紀子さんが、バンバンと手を叩きながら、舞台に近づいてくる。「立つ位置が違うでしょう」と舞台の子どもたちに指示をだす。それにじっと耳を傾け、まわり同士で位置を確認しあう子どもたち。稽古の合い間、ロビーで刑事役の大久保健さんは、振り付けの練習に夢中になっている。

横浜市都築区の市民ミュージカル劇団「ヨコハマ・都築ミュージカル委員会（YTM）」が公演する「夢の中の音楽家たち」の前日に行なわれた舞台稽古の様相である。

都築区は洒落た街並みが広がる新興の住宅街、区制が引かれたのが平成六年十一月、翌七年に公会堂を含めた都築区総合庁舎が落成した。その落成の記念公演として、「北極星を探して」を公演したのを皮切りに、ほぼ毎年YTMは、都築区公会堂で才



2001年/五神町文化祭  
ミュージックコンテスト



リジナルのミュージカルを公演している。今年、二日間にわたって公演されるミュージカルの原作は、平成七年の公演では、子どもとして出演し、現在では大学生となった志田佳則さんだ。

このミュージカルのあらすじはこうだ。ロック、演歌など分野は違っても音楽好きな中学生、アキラ、康之、道子、真弓の四人組。自分たちの夢を理解してくれない親とはケンカばかり。ただそのなかで、母親のいないアキラは、仕事人間の父親とはケンカもできない。そのアキラが心開ける大人が、「丘の上の小さな小屋」に住みついたジージと呼ばれている男だった。いつしか、ほかの三人も小屋に集まるようになる。あるとき、それぞれ親とケンカした子どもたちが小屋に駆け込み一夜を明かす。心配した親たちは、警察と協力して、ジージを街から追い出そうと謀る。ジージを守ろうとする子どもたち。その対立が親と子の絆をとり戻すことになる。それを見届けたジージは街を去る。子どもたちは、自分たちの声をジージに伝えたいと、小屋に残されたカセットから聞こえる曲を引っさげてコンテストに出る。このコンテストには、この四人のほか、チャ・ガール、鼓笛隊、八木節、カラーカードなどが出演する。



色鮮やかで、テンポある舞台が観客を楽  
しませてくれる。三回の公演とも、六百  
余りの観客席は満杯になる。

出演者は、区内の大人から子どもまで  
総勢六十四名。そして大道具、小道具、衣  
装、メイクなどキャスト裏方を含めると  
百五十名をゆうに越す。大人たちの職業  
は、地元の建築家、デザイナー、ダンスの  
先生、サラリーマンなど多彩だ。この人  
たちが稽古日、二日にわたる公演と三日  
間、朝から夜まで張り付いてひとつの舞  
台を作りあげていく。

全てを終えた後、鼓笛隊でがんばった  
小学二年生の岡本尚馬君に、「疲れたア？」  
と聞くと、「疲れた。けどあしたもまたや  
りたい」と答える。稽古、公演を経験す  
るなかで、引っ込み思案だった子どもが、  
見違えるほど積極的な子になっていくと  
いう。大道具役の江幡千代子さんは「子  
どもたちが、どんどん変わっていくのを  
みるのが楽しい」という。厳しい稽古に  
耐えながらも、大勢の人がひとつのもの  
を創り出すという、その過程がみんなを  
惹きつけるのだろう。アマチュアではあ  
りながら、質の高いオリジナル作品づく  
りをめざすYTMの活動は、都築区に新  
しい文化を作っていくだろう。